第 22 回（2019 年）まちづくり・都市デザイン競技　結果概要

主　催：まちづくり月間全国的行事実行委員会、公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター
後　援：国土交通省、岡崎市
事務局：公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター

趣　旨

これからのまちづくりにおいては、そこに生活し活動していることの豊かさが実感でき、誇りのもてる優れた景観を備えた環境整備が重要になっています。現代の活動にふさわしい新たな都市景観の形成には、まちの歴史や環境に配慮しながら、その都市固有の品格を備えた洗練された表現と演出が求められ、その魅力が都市に活力を呼び戻し、新たな賑わいを伴って、まち全体が活性化していくことが期待されます。

こうしたまちづくりの課題を踏まえ、本「まちづくり・都市デザイン競技※」は、地域にふさわしい整備構想とまちのデザインについての提案を広く一般から募り、まちづくりに対する国民の関心を高めるとともに活力ある美しい景観を備えたまちづくりの実現に寄与することを目的として、平成 10 年度より毎年実施しており、今年度で第 22 回目を数えます。

※第 21 回表彰より本競技の名称が「まちの活性化・都市デザイン競技」から「まちづくり・都市デザイン競技」に変更となりました。

対象地区

今年度は、愛知県岡崎市の玄関口である名鉄名古屋本線「東岡崎駅」から西へ約 1.5 ㎞、南北の幅約 200～600m の「岡崎城周辺地区」（約 80ha）を対象地区に選定しました。（図 1 参照）

東岡崎駅を出て北へ向かうと、市街地を東西に貫く一級河川矢作川水系「乙川」が現れます。この乙川に架かる令和 2 年 3 月に供用を開始した新たな人道橋「桜城橋」を横目に通り過ぎると、間もなく市のシンボル「岡崎城」のある岡崎公園にたどり着きます。緑豊かな公園を抜け、板屋町の旧東海道沿いに町屋がわずかに残る住宅地を通り抜けると、八帖町に至り、伝統産業の八丁味噌造りの蔵並みが続くまちなみ景観に歴史的な風情を感じることができます。

当該地区では、豊かな自然と伝統ある歴史文化、そこに寄り添う暮らしや営みが集積している強みを活かし、居心地が良く歩きたくなるまちなかを形成することが期待されています。

この地区は、市が平成 27 年度に着手した乙川リバーフロント整備地区の一部（東岡崎駅エリア、乙川エリア、岡崎城・伊賀川エリアの各一部）と重複した地区設定となっており、「東岡崎エリア」「乙川エリア」「岡崎城・伊賀川エリア」にはそれぞれの特性に合った定義と将来像が設定されています。

募集内容

岡崎市は、まちなかで多様な人々が出会い、交流を通じたイノベーションが生まれる、そのような豊かで魅力的な生活実現の場としてまちなかが再生し、多くの人々を惹きつけ、好循環を生む未来を思い描いています。

本競技では、公共空間を民間投資と共鳴しながら歩行者中心の空間に転換・誘導することで、居心地がよく歩きたくなるまちなかとするための都市デザイン及び整備手法に関するアイデアを求めました。

提案に当たっては、50 年後の岡崎城周辺地区のあるべき理想的な姿を描きつつ、10 年～20 年後に実現すべき、持続可能なものであるものとし、特に以下の点について提案を求めました。

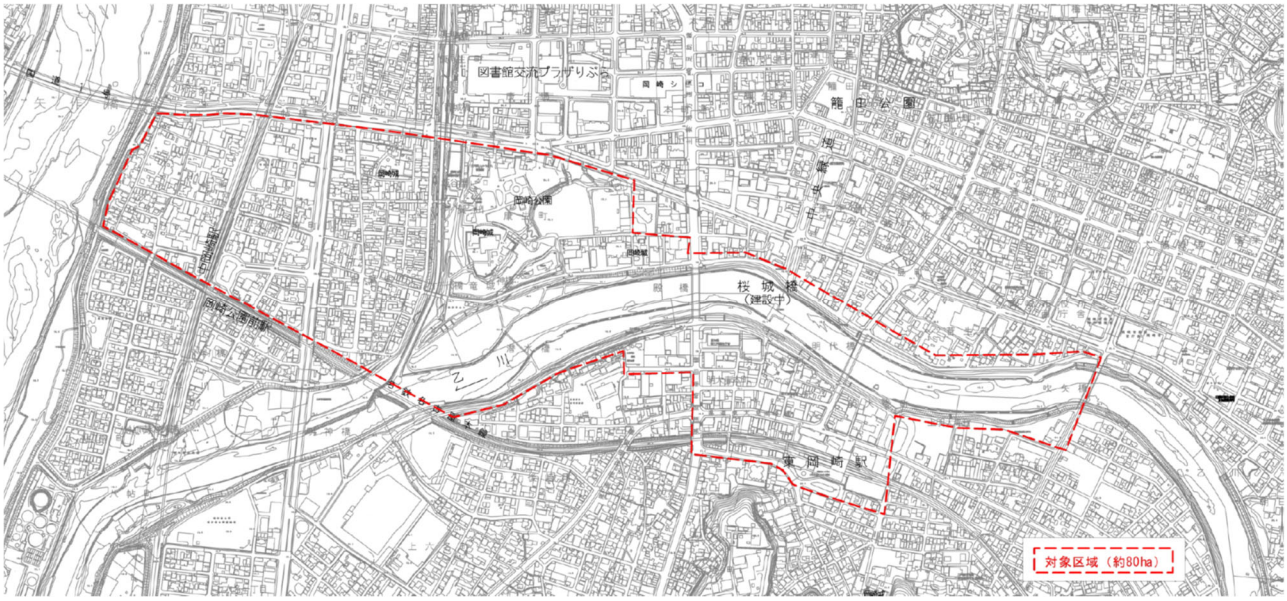


図 1 対象地区

(1)　歩きたくなるまちなか形成のための都市デザインと整備手法の提案

①　東岡崎駅～桜城橋

東岡崎駅から乙川の河川空間に至るエリアは、東岡崎駅を出た来訪者を初めに出迎える場所です。現在の土地利用は居酒屋等の夜間営業を中心とする飲食店が多く、昼間は賑わいがありません。また、近年は老朽化した建築物が駐車場に姿を変え、都市のスポンジ化の兆候が見られます。更に駅から主要な観光拠点が離れているため、初めて訪れた人はどこへ行けば楽しい体験ができるのかが分かりにくい状況です。

そこで当該エリアについては、人中心のまちなかへの修復や改変により、東岡崎駅を出た来訪者が興味を惹かれ、居心地が良く歩きたくなるまちなかが形成される提案を求めました。

②　岡崎公園～八丁味噌蔵

観光拠点である「岡崎城」と「八丁味噌蔵」の間に位置する板屋町界隈は、用途地域が商業地域となっていますが、近世の町割りのままで高度利用がされていません。また、鉄道駅にほど近いエリアでありながら、近年は空き家が増加しており、来訪者が往来する姿を見ることもほとんどありません。

そこで当該エリアについては、エリア固有の魅力を高めることで、2 つの観光拠点間を結ぶ中間拠点となり、住みたいまち・訪れてみたいまちとなる提案を求めました。

（提案における観点）

・多様なユーザーの居心地の良さに着目した公共空間デザイン
・人々が滞在・交流できる街路空間への転換
・「かわ」と「まち」が融合した良好な空間形成
・低層部がまちに開かれたまちなみ景観の形成
・歩行者を中心とした公共空間の創出
・リノベーションや小規模な建替え、コンテンツの創出等を含めたまちなかの改修
・小さなチャレンジ型まちづくり活動の推進
・民間空地等の利活用促進

(2)　殿橋から岡崎城天守を望む眺望景観のあり方

東岡崎駅から岡崎城へ歩く道すがら、殿橋の南西踊り場で足を止めると、この場所が乙川越しに岡崎城天守を望む絶好の視点場であることに気づきます。奥行きと抜け感のある河川空間の先に佇む、緑に囲まれた岡崎城の姿は、市民が最も大切にし、誇りと大きな愛情を持っている景観です。美しく風格あるこの眺望景観は、将来にわたってその価値や魅力の維持向上を図っていく必要があります。

現在の優れた眺望は、岡崎城が乙川北岸の半島状段丘の先端に位置し、天守の前景が河川空間であることや、城の西を流れる伊賀川以西の地盤が一段低いこと、視対象である天守の背後地である板屋町の土地利用が主に低層住宅であり、ほとんどの建築物が地形的な不可視深度に収まっていること等によって成立しています。しかし、背後地の用途地域は商業地域に指定されていることから、今後の土地利用動向によっては天守の背後に高層建築物が出現し、優れた眺望が損なわれることも懸念されます。

そこで、自然、歴史、くらしが一体となった市民が大切にする眺望景観の維持向上に関する都市デザインと整備手法の提案を求めました。

（提案における観点）

・優れた眺望景観の魅力向上（改善を含む）

(3)　上記（1）及び（2）に共通する提案における観点

・地域特性を活かした個性ある都市デザイン
・多様な空間の使い方・用途を許容するまちなみのデザイン
・そこにとどまりたくなるような開かれた空間デザイン
・昼も夜も歩きたくなる夜間景観の創出

応募図書

上記の募集内容に即して、対象地区の整備構想、主要な提案空間のデザインイメージ、実現化方策等を A2 サイズのパネル 2 枚に表現したものと、提案の要旨を A4 サイズ 1 枚にまとめたものを応募図書として提出を求めました。

スケジュール

■応募登録期間
令和元年 9 月 18 日(水)～令和 2 年 2 月 14 日(金)
※現地説明会参加希望者・質疑提出希望者は
令和元年 10 月 29 日（火）まで

■現地説明会
令和元年 11 月 5 日（火）

■質疑受付期間
令和元年 11 月 5 日（火）～11 月 12 日（火）

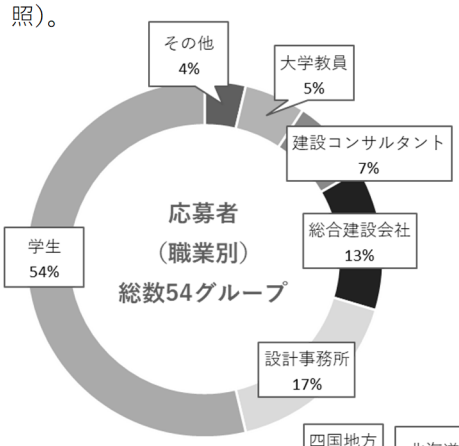
■応募図書提出締切
令和 2 年 2 月 28 日（金）17 時必着

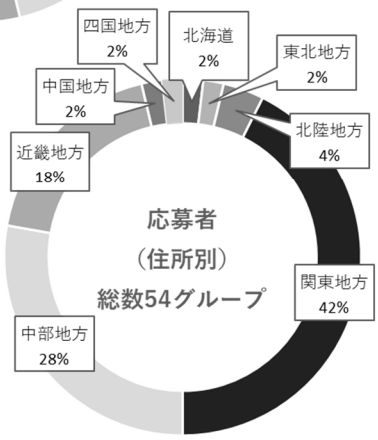
■審査委員会
令和 2 年 3 月 12 日（木）

■表彰
令和 2 年 6 月（予定）

応募件数・応募者の属性

事前の応募登録数が 76 グループあり、最終的に 54 作品が提出されました（応募者代表者の属性は円グラフを参照）。





審査委員会及び結果

1．審査委員会

［委員長］

西村幸夫　神戸芸術工科大学教授、東京大学名誉教授

［委　員］

石川幹子　中央大学研究開発機構教授、東京大学名誉教授

岸井隆幸　(一財)計量計画研究所代表理事、日本大学特任教授

高見公雄　法政大学教授

藤本昌也　建築家

渡邉浩司　国土交通省市街地整備課長

内田康宏　岡崎市長

【第一次審査】

審査委員が各作品を一通り閲覧し、一回目の投票が行われ、有望作品として十数点があげられました。

【第二次審査】有望作品一つ一つについて議論された後、二回目の投票により入賞候補作品が絞り込まれました。

【最終審査】

入賞候補作品を並べて、相互に比較検討しながら大臣賞をはじめ各受賞作品が選定されました。

2．審査結果

審査委員会での審査の結果、下記の方々の作品が選定されました。

※岡崎市長特別賞は岡崎市により選定

国土交通大臣賞　…賞状及び賞金 50 万円

小林 洸至

［アオイ設備工業株式会社］

まちづくり月間全国的行事実行委員会会長賞

…賞状及び賞金 25 万円

横山 紗英/川島 和馬/大木 茉由/峯田 鈴音/

長塚 瑞穂/飯田 珠実/伊藤 直也/韓 煜明/

小泉 文佳/中山 知香/熊谷 春輝

［中央大学 研究開発機構 グリーンインフラ研究室］

(公財)都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞

…賞状及び賞金 15 万円

村上 修一/井口 陽介/寺山 友香/西村 成貴/

王 琪雯/井口 とも/多田 裕亮/中野 美香/

西村 実穂/橋目 恵里

［滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科/

滋賀県立大学大学院 環境科学研究科 環境計画学専攻］

奨励賞（2 点）　…賞状及び賞金 10 万円

坪内 健［北海道大学 大学院工学院］

菊地 翔貴［株式会社ドーコン］

加持 亮輔［株式会社エスエー

デザインオフィス一級建築士事務所］

川上 周造/北原 遼大/下山 萌子/髙須 有希

中西 芳樹/松永 幹生

［株式会社竹中工務店/早稲田大学大学院］

岡崎市長特別賞　…賞状及び記念品

上林 就/網倉 朔太郎/児玉 創/岡村 壮真

［東京大学 工学部 社会基盤学科/

東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻］

総評

■「50 年後の岡崎城周辺の姿を描く」ことが課題のひとつとして与えられていたため、審査委員会でも 21 世紀の都市デザインは何を手がかりにやればいいのか、という議論となった。歩きたくなる空間デザインの多様な工夫に比べ、岡崎城をめぐる景観に対する提案が限られており、非常に残念である。都市スケールで環境デザインを議論する姿勢が必要だと思われる。

■乙川という自然環境、そして河岸段丘上に位置する岡崎城という豊かな資産を有する都市の 50 年後の理想像を描き、そのための具体的提案をするという、「都市デザイン」の本質を問う競技設計であった。一つ一つの提案に、この課題を真摯に受け止め、取り組んだ足跡を読み取ることができ、極めて質の高い作品がよせられたと考える。

総じて、2020 年となり、21 世紀も 20 年を経過したが、20 世紀的都市デザインの系譜からの本格的離脱が始まっていることが、明確に打ち出された競技設計であった。

■岡崎という経済面では全国の中では恵まれている部類の都市中心部の 50 年後を問うといった難しい課題を扱い、一方要項で一定程度求める内容を明示した中での提案競技であった。印象としては、上位の都市将来像や課題からブレークダウンして行き解答を見つける、といった取り組みに比して、比較的身近で肌感覚から発想して将来像に至るといったアプローチが成功しているように思えた。地域の資質や歴史など踏まえた既成市街地の改造は、実はこう言ったところに答えがあるのではないか、ということを考えさせられる内容であった。

■今回のまちづくり・都市デザイン競技は市の側のこれまでのまちづくり活動をベースに計画論としての現状認識、課題の整理がよく整理され、コンペの応募者にとっては非常に明解な取り組みになったと考えられる。それだけに応募案はその市の路線にのったかたちになり、各々が同じような提案になってしまった感がある。歩きたくなるまちづくりから住みたくなるまちづくりが 50 年先を考えれば重要になるとも考えられ、市としては現状その観点からの計画論を構築してほしい。住み続けられ、住み継がれる“定常型社会”づくりこそこれから求められていると思っている。

入賞作品の概要

入賞作品の概要・講評は次頁の通りです。

（公財）都市づくりパブリックデザインセンターHP でも詳細をご覧いただけます。（https://www.udc.or.jp）

第 22 回 まちづくり・都市デザイン競技

国土交通大臣賞

余白の編集
～三河花火を嗜むためのホテルをランドマークに～

受賞者

小林 洸至

［アオイ設備工業株式会社］

岡崎城と八丁にはある程度の観光客が訪れるが、両者の間を歩く人はほとんど見ない。距離が遠いため、街中を歩く人を増やすには、途中で一息休憩する場所が必要である。また、板屋町はかつて花街であったが、歴史的建造物は日に日に取り壊され、街道沿いの街並みは空前の灯火である。本提案は、岡崎公園前駅に近い太田邸と、岡崎公園の多目的広場東に位置する吉田邸を三河花火を主題としたホテルへとリノベーションし、二つの歴史的建造物を行き来する人の流れを創出することを意図する。

八丁に近い太田邸は、空き家となっていて現在所有者が活用を検討している。八丁エリアは駅も近く飲食店が多いため、ホテルに加えて、食前に立ち寄れる甘味処として、あるいは食後に立ち寄るアイスクリームパーラーとして計画する。岡崎公園東の吉田邸は、ホテルの機能に加えて、かつての商店の店構えをそのままに花火問屋としての機能を持たせる。宿泊とセットで三河の玩具花火を提供し、和風家屋の縁側でプライベート花火を嗜むことをコンセプトとする。太田邸の客室には、線香花火の炎の燃え方の呼び名の、「蕾」「牡丹」「松葉」「散り菊」を部屋名に掲げ、吉田邸は打ち上げ花火の燃え方の「残月」「錦冠（にしきかむろ）」を部屋名とした。太田邸と吉田邸をランドマークに周辺に変化が生まれる。

板屋町においては、旧西岡崎駅の整備時の名残である大幅の南北道路があり、余白となっているため、歩車共存のジグザグ道路（シケイン）を設けて、くぼみは一時駐車スペースとなるようにした。

ニューグランドホテルを低層化するプログラムは、殿橋からの岡崎城の景観確保の理由と、吉田邸が位置する多目的広場北の斜面地一帯から乙川と夏の奉納花火大会の打ち上げ花火への眺望を得るための理由を重ねている。

東岡崎駅から桜城橋までの最短距離での動線がない課題については、萬徳寺の墓地を移転し、敷地を横断する遊歩道を設けた。

審査講評

■地元をよく知る人が愛情を込めて描いた岡崎の近未来図。古民家を、丁寧に生かし、全体の未来像を提案していることが高く評価された。岡崎公園の濠の再生等、吉田邸との連携で価値のある空間に創生されると考える。東岡崎駅前は萬徳寺の墓地を活かし、岡崎市の歴史を継承する空間となっている。

■丁寧に素材をみつけて、その具体的かつ現実的な解を示すことで、岡崎市街地の将来を指し示す真摯で人間的な提案に感動した。これからの街づくりは、このようなアプローチが大切なのではないかということを計画案としてまとめた秀作。なお、東岡崎駅周辺に対する提案がより充実すると更によくなると思われる。

■地域の個性にしっかりと向き合い、まちの魅力の拠点となる建築（民家）を発掘しながら各々を結びつけ歩きたくなる道づくりを行っている点が高く評価された。地域の場所性を体感しながら構想されていると考えられ、そのスタンスが今後の 21 世紀のまちづくりに不可欠と考えられるので、行政のまちづくりとして十分に参考にしていただきたい提案。

■入念な調査により、深いレベルで地域特性を読み解いた本作品からは、地域への愛とあたたかな眼差しが伝わってくる。一軒一軒の建築物の具体的で詳細な活用（リノベーション）提案のスケッチは、実現可能性を感じさせる高いレベル。建築物の高さを低層に抑えたまちなみのグランドデザインによって、城下町の風情や城への眺望を地域全体で創出しようとするアイデアは、ヒューマンスケールで身の丈に合った都市デザインで、検討に値する提案。

第 22 回 まちづくり・都市デザイン競技

まちづくり月間全国的行事実行委員会会長賞

時空を超える　歴史・みらい都市　岡崎
～みんなで育てる「まちなかコモンズ」～

受賞者

横山 紗英 / 川島 和馬 / 大木 茉由 / 峯田 鈴音 / 長塚 瑞穂 / 飯田 珠実 / 伊藤 直也 / 韓 煜明 / 小泉 文佳 / 中山 知香 / 熊谷 春輝［中央大学 研究開発機構 グリーンインフラ研究室］

岡崎市は、徳川家康の生誕の地であり、乙川の形成した段丘崖の突端に築かれた岡崎城は、幾多の星霜を経て継承され、時空を超える輝きを放っています。私たちは、この旧城下地区を、岡崎市の誇りとするコアとして位置づけ、「まちなかコモンズで創り出す、歴史・みらい都市」を提案します。まちの将来像は、「大地の恵みに満たされ、伝統と創造の共存する、人と人がつながる優しいまち」です。この実現にむけて次のプロジェクトを提案します。

まず、乙川に豊かな自然環境を再生し、岡崎城と城下地区をつなぐ岡崎セントラルパークを創り出していきます。まちなかには、にぎわいのある多様な拠点を、みんなの力で生み出し、歴史と未来を巡る回遊ルートをつくり、歩きたくなるまちを実現していきます。東岡崎駅前地区には、ステーション・フロントとして情報センターを整備し、岡崎市の顔となる多世代居住の新しいアーバン・コンプレックスを創り出していきます。

まちなかコモンズを実現していくために、公民連携の「まちなかコモンズ協議会」をつくります。この協議会の特色は、これまでの NPO、自治会、ヴォランティアにとどまらず、事業性を兼ね備えた「事業者市民」を育て、まちの活力の基盤を、耕すことにあります。

審査講評

■アーバンデザインの戦略をバランス良く示した好感の持てる提案。岡崎城への眺望に対する配慮もなされている。“まちなかコモンズ” という、新しい都市デザインの手法の提案が高く評価された。公民連携の具体的手法として今後につながるもの。立体都市公園制度を活用して、岡崎城の景観保全に配慮した未来像かつ提案がなされている。

■〈公〉と〈知〉の中間領域〈共〉空間（コモンズ）として注目し、まちの“居場所”づくりに仕立て上げネットワーク化している〈作法〉が評価された。21 世紀のまちづくりは〈建築〉づくりではなく、“〈空地〉こそ最大の価値”という視点にたってまちなか再生を行っていくことが極めて大事であることを市民と共有しながら具体的なまち再生につなげてほしい。

■5 つの提案が具体的な進め方も含めて提案されており、全体としてうまくまとめられている。空き家空き地問題に対し、コモンズというわかりやすいテーマを取り上げ、わかりやすくまとめた点を評価する。

■建造物の高さを抑制し、城と川の眺望を守ることが地域全体の価値を高めるという発想に共感が持てる。

第 22 回 まちづくり・都市デザイン競技

（公財）都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞

PSO LEAGUE：まちづくり惣まくり

受賞者

村上 修一 / 井口 陽介 / 寺山 友香 / 西村 成貴 / 王 琪雯 / 井口 とも / 多田 裕亮 / 中野 美香 / 西村 実穂 / 橋目 恵里

［滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科 / 滋賀県立大学大学院 環境科学研究科 環境計画学専攻］

岡崎藩の財政改革時に家臣団結束の礎となり、幕末の岡崎藩士の信条にもなったという、本多忠勝公の遺訓「惣まくり」。あらゆることを徹底的に行おうという、この精神を未来に向けて引き継ぎ、QURUWA 社会実験や乙川リバーフロント整備などの先進的なまちづくりをさらに発展させ、市民総出のまちづくりを、中心市街地全体に行き渡らせるしくみ「PSO リーグ」を誕生させます。

PSO は、Public Spaces for Okazaki の略称です。PSO リーグは、岡崎市中心市街地における官民の公共空間（街路、河川、公園緑地、低未利用地）を活用してまちづくりに取り組む団体が、チームとして加盟する組織です。このリーグの理念を、「チームのメンバー自らが楽しみながら活動することで、居心地の良い、楽しくて歩きたくなる、美しいまちにすること」とします。

このリーグの拠点を、岡崎城のお膝元である本地区に形成します。具体的には、太陽の城跡地に計画中のコンベンション施設に、リーグの本部（事務室、会議室、展示室）を置くことを想定します。また、本部の東側（東岡崎駅～桜城橋エリア）と西側（岡崎公園～八丁味噌蔵エリア）を、リーグの重点エリアとして、既存チームの支援や、新規チームの立ち上げといった支援を行います。各チームの活動する公共空間がゆるやかに増えていくようにすることで、居心地がよく、歩いて楽しく、美しいまちにすることを提案します。

また、リーグ重点プロジェクト SHIROMI により、殿橋や城見通からの岡崎城天守の眺望景観を守り育てます。岡崎城眺望景観保全エリアの設定を前提に、市内で活躍するチームが、得意とする分野の景観構成要素の維持向上に取り組みます。催事による収益をリーグが Social Impact Bond として積み立て、空中権買い取りや、周囲の建物等の買収（減築・解体）という、時間を要する事業にあてます。

審査講評

■オープンスペースから始まる都市デザインの方向性を良く描いている。PSO（Public Spaces for Okazaki）という概念で、多様な活動を提案していることが評価された。岡崎城の背後の景観のコントロールを明確に示していることが重要である。

■「PSO リーグの行動計画とその実行中の市街地像」と呼べるような作品で、今後の街づくりに重要な示唆を与えていると思う。「こういうことをしたら良いと考える」ことはさほど重要ではなく、「こういうことをします」と言い実行することこそが、成熟市街地でなすべきことということ。

■当プロジェクトは〈コモンズ〉をパブリックスペース（公空間）として解いている。公共の側が十分力があるならば地権者を巻き込みながら展開できるであろう。重要な拠点は〈PSO〉で、その他は地権者相互の協調による〈コモンズ〉で行うという公民連携で行うのが望ましいのかも知れない。

■縮退の時代にまちの隙間を豊かに使うための工夫として、様々な状況を想定した空間整備、アクティビティ、リノベーション、まちでの過ごし方が提案されており、それらが実装されたまちを歩く姿を想像すれば、随所に発見のある楽しいまちなみが目に浮かぶ。まちなかで発生する多様な課題への対応策として個々のアイデアや仕組みは検討に値する。

第 22 回 まちづくり・都市デザイン競技

奨励賞

DEMARU
～城下町を守る「眺め」と「流れ」～

受賞者

坪内 健 [北海道大学 大学院工学院]
菊地 翔貴 [株式会社ドーコン]
加持 亮輔 [株式会社エスエーデザインオフィス一級建築士事務所]

『DEMARU』は、既存計画『QURUWA』の対となり、波及効果や相乗効果を生むために周辺エリアの整備を重点的に行う提案です。出丸とは、城から飛び出た位置につくられた曲輪のことで、城の防御力を強化する役割を担っていました。『DEMARU』は、城の眺めと川の流れをまちのどこからでも体感できるまちの実現に加え、今後の激甚化する気候災害のリスクも考慮し、災害に強いまちづくりを実現する戦略です。

審査講評

■力強い筆力で岡崎の将来像を描ききっている。出丸とその 2 つの要素（櫓と川床）を提起し、そこから都市デザイン全体を提案しているのは見事。

■「櫓」と「川床」というデザインのツールを活用してわかりやすい都市デザインを提案しており、防災という視点を取り入れていることが評価された。ただし、ペデストリアンデッキという形態は、手法としては 20 世紀型であるため、メッセージの出し方としては、検討が必要であった。

■ホテルを移転させ、城の景観を回復させたり歩きたくなるための場所のリフォームを注意深く進める提案が好感をもたれ評価された。都市デザインのクオリティという意味ではいささか物足りない点も指摘されたが、志を忘れずに都市デザインの力をつけていただきたい。

■市民が誇りとする岡崎城への眺望の質を高める取組みとして、建造ボリュームのコントロールや、明快な視点場の設定は非常に有効な手法。近年、頻発する水害への対応として、河川整備等による強固な守りを固めるハード整備に依存するばかりでなく、まちに溢れた水をしなやかに受け流そうとする都市デザインの思想は、過去に何度となく水害を経験してきた城下の低地地区における新たな浸水対策の方向性を示した点を評価。

第 22 回 まちづくり・都市デザイン競技

奨励賞

「街みち」と「宿り場」で賑わいが巡る
ー東海道と総曲輪の現代的再興ー

受賞者

川上 周造 / 北原 遼大 / 下山 萌子 / 髙須 有希 / 中西 芳樹 / 松永 幹生

[株式会社竹中工務店 / 早稲田大学大学院]

近代化以前、岡崎城周りは宿場町として栄え、住民と来街者が行き交う総曲輪と東海道といった都市軸が形成され、まちに賑わいが溢れていました。それらの都市軸は、「機能性」(function) と「官能性」(sensuous) を併せ持ちバランスのとれた都市構造となっていましたが、近代化の過程で、国道や鉄道が整備され、移動手段としての「機能性」が急激に発達しました。それに伴い、徐々に岡崎から、歩行者の活動などの「官能性」が抜け落ち、まちに賑わいが薄れていきました。現在、QURUWA 構想を中心とした計画により、中心市街地に活動が生まれています。しかし、まちなかで生まれた賑わいが周辺地域にまで行き届いていないことにより、移動手段の偏りや道路・河川による空間の分断、ベッドタウン化といった様々な都市問題が表出しています。

そこで本計画では、かつての岡崎のように、複数の都市軸をデザインすることで、岡崎全体に「機能性」と「官能性」が好循環する都市構造を作り出します。賑わいを巡らせる流れ「街みち」と、賑わいを生みだすたまり「宿り場」を計画し、現在岡崎に表出している都市課題を解決しつつ、小さな活動がまちの至る所で生まれるような、賑わい巡り、賑わいに溢れるまちへ岡崎が変わります。

また、上記のような都市構造転換と併せて、大きく 5 つの側面から持続的・自律的な岡崎を実現します。1 点目が新たなモビリティ拠点と動線の計画による「モビリティ革新」2 点目が歴史と自然を一体的に整備しながら景観を保全する「地域資源の保全・革新」、3 点目が企業のサテライトオフィスや観光産業、モビリティ系企業等を誘致する「持続可能な産業の育成」、4 点目が住民の日常的な健康や暮らしを支えながら、非常時の防災機能を充実させる「生活支援機能の拡充」、5 点目が住民に親しまれるような場づくりや新規プレイヤーも巻き込んだまちゼミ等の「住民参画の促進」です。

城を中心に賑わいが生まれ、東海道を通って人や物と共に巡っていた、かつての都市構造を現代によみがえらせ、人々の細やかで多様な活動があふれ、まち全体が賑わう 50 年後の岡崎像を描き出します。

審査講評

- ■東海道と総曲輪という歴史的特性を活かし、新しい都市デザインに収斂させていることが、高く評価された。しかしながら、東岡崎の駅前地区については、20 世紀型のデザインの領域を脱することができず、より深く考察すべきであったと考える。
- ■4 つの地区に対し、“街みちと宿り場” というキーワードを用いそれぞれに様々な工夫を施そうとしている点は評価される。個別の空間デザイン、都市における建築のあり方については更なる工夫が望まれる。
- ■まちなか再生には〈居住〉と〈サービス〉の回復が大きな課題になっている。何の〈サービス〉施設が求められているかを居住者参加のかたちを探り、実現しようとするスタンスが評価された。
- ■50 年後の将来像を示しつつ、段階的に小規模な整備を進める展開は、公民連携の取組みの中で、関係主体が目標とするビジョンを共有しつつ、それぞれに過度な負荷が生じない手法として有効なプロセスだと考えられる。思考のベースを定住促進に置きながら、観光、産業育成、子育て等の幅広い課題を結び付けて同時に解決を図る論調も高く評価したい。

第 22 回 まちづくり・都市デザイン競技

岡崎市長特別賞

身近な空、つながるまち

受賞者

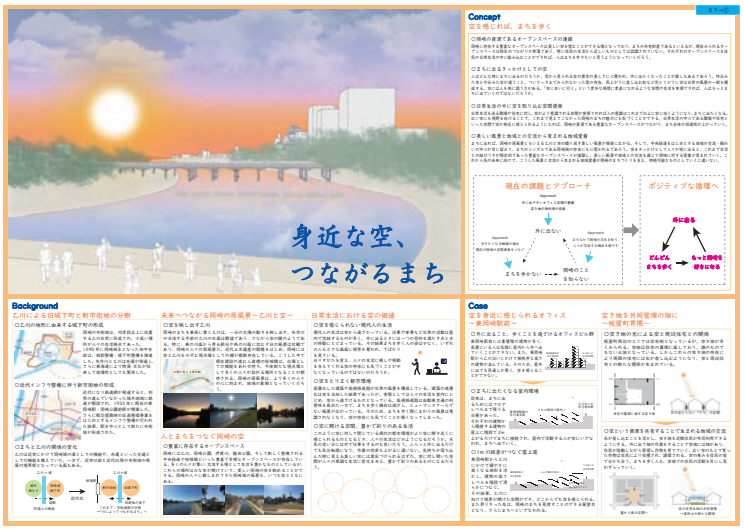
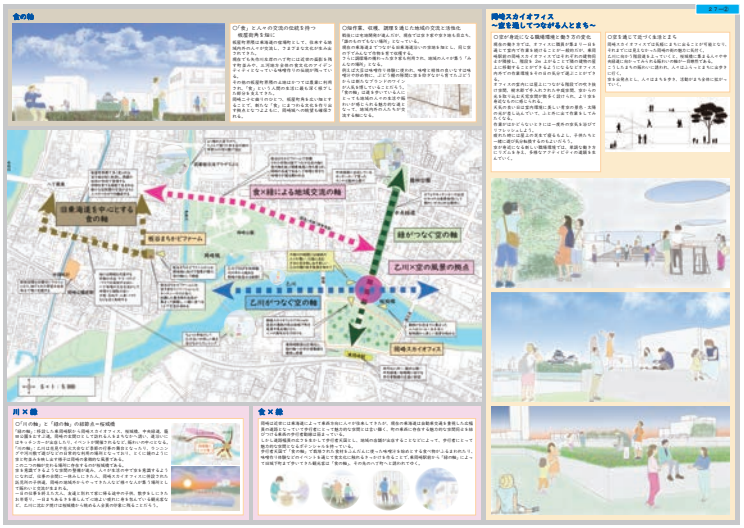
上林 就 / 網倉 朔太郎 / 児玉 創 / 岡村 壮真

[東京大学 工学部 社会基盤学科 / 東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻]

岡崎は乙川沿岸の地形を利用し近世の城下町整備で成立した市街地と近代インフラ整備後に形成された新市街地という成り立ちの異なる市街から成り立っており、乙川によってこれらの市街地は分断されてきた。岡崎を東西に貫く乙川は晴れの日が多い岡崎の一日の太陽の動きを映し出し、水面にくっきりと空や街並みが反射している様子は岡崎の原風景である。乙川以外にもオープンスペースが豊富な岡崎ではその他にも開けた空を望むことのできる地点が数多く存在する。しかし、建物外に出る機会の少ない、忙しない日々の中で、美しい空が広がっていたとしても多くの現代人にとっては目に止めることすらないというのが実情なのではないか。

人々が岡崎の空の魅力に気づき、空を見るために外に出てくることが、人々が町を歩きたくなるためのきっかけとなる。今回提案する東岡崎駅前のオフィス建築では現在駅前空間と乙川沿いの回遊空間とを建築群が分断している問題に対して、屋上の利用によって建物内から屋外へ出ることを容易にするとともに、駅前から乙川沿いや中央緑道といったまちなかに人がゆるやかに誘われる空間の実現を目指した。

板屋町界隈に対しては、現在増えている空き地を「空を共有する場所」と捉え、周辺住民が共同利用して作物を育てることを支援する。味噌作りに代表される地域に根ざした「食」の伝統を現在に継承するとともに、人間の生活の根本にある食の生産、消費を通じた地域の交流を生むきっかけとなる。すでに様々な空間資源がある岡崎では、それらの資源を結びつけた整備や取り組みを行ってゆくことで、岡崎の空の魅力によってひとたび町にいざなわれた人々がまちの様々な場所に歩いてゆくこととなる。岡崎の伝統や文化に触れたり、人々の間の交流、新たな岡崎の風景を発見してゆくことによって岡崎のまちを好きになり、さらに岡崎のまちを歩いてゆくというポジティブな循環が生まれる。

審査講評

本作品からは、乙川の河川空間で空を見上げながら散歩やボート遊びを楽しむ市民の姿が、鮮やかなイメージとして伝わってきた。乙川の水面を「太陽の動きを映し出す」装置として捉え、そこから時間や季節の移り変わりを感じ取る感性や、多くの人が親しみを持てる「空」を切り口として都市空間の公共性とそのあり方を論じ、新しい空間の捉え方を提示した点などを高く評価した。生活者や来街者が体感的に認識できる範囲の景観を整え、空や自然を身近に感じられる都市デザインを志向する姿勢は、「歩きたくなるまちなか」の形成を目指す上で強く共感できる。「スカイオフィス」の提案で、隣接する建築を物理的に繋ぎ、連続するプライベートな屋上空間を誰もが行き来できる公共的な空間に転換しようとしたアイデアも面白い。また、乙川や緑道がつなぐ「空の軸」と、地場産業の八丁味噌や地元食材を体感的に楽しめる「食の軸」の創出に関する提案にも興味を惹かれた。土地利用の公共性に関する議論を深めるとともに、岡崎の地形や自然、歴史文化に根差した景観形成を進め、子供たちが「ふるさと岡崎」に対する誇りと愛情を育むまちづくりを進めるにあたり、意義深い提案である。（岡崎市）